

日本文化人類学会 次世代育成セミナー

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 文化／社会人類学セミナー

発表要旨

A 会場

「テッティカイ」と病いの経験—現代ネパールにおける糖尿病と責任—

中村友香（日本学術振興会特別研究員 PD）

本稿の目的は、ネパールの糖尿病患者の「テッティカイ (tyettikai, ただそうなった)」という語りと態度に着目し、患者やその周囲の人々が糖尿病の経験をいかに理解し、病いと付き合おうとしているのかを明らかにすることである。ネパールにおける近代医療は、保健医療に関する開発援助の拡大してきた。その中で治療の失敗は、患者の「無知」や「無責任」に主に原因が帰せられる傾向にあった。本研究はいわゆる生活習慣病と呼ばれる慢性の病気が拡大し、現地社会において広く認知され、対処されるようになった現代ネパールを対象とする。臨床の場における治療の失敗に関する説明は、開発に置けるプロジェクトの失敗に関する説明の延長上にあり、患者の知識や責任が問われる状況は強化され、その範囲は拡大してきた。一方患者たちは自らの身体の状態について医師が説明する知識や責任を理解しつつも、しばしば糖尿病に関わる経験や状況について「テッティカイ (tyettikai, ただそうなった)」と発言した。本稿は、こうした患者たちの診察室や日常生活での発言と態度について、病いをめぐる意志と責任と南アジアのパーソンと社会関係についての研究を参照し、ネパールにおける病いをめぐる行為主体の在り方や、その意味について明らかにした。

本稿で取り上げる患者たちは、因果や行為を取り巻く環境や社会関係、身体的感受性などの複数の繋がりの中で糖尿病の経験を受け止めており、さらに物事への応答性を複数の行為者と分有することにより病いの不確かさや偶発性を理解していたと考えられる。さらに、そうした理解を可能にする社会関係は患者たちの存在の維持を可能にする肯定的な関わりであったと捉えられる。

ネパール・ゴルカ地震の記憶と弔い—カトマンドゥ盆地ネワールの死の儀礼に着目して

伊東さなえ（京都大学人間文化研究機構）

2015年、ネパールで大地震が発生し、甚大な被害をもたらした。本研究では、この地震による死者を誰がどのように弔うのかについて検討する。

日本では、災害による死者に対し、無宗教の記念碑が建てられ、震災の記念日には黙祷や献花

などの儀式が行われることが多い。一方、インドネシアの津波災害や日本の阪神・淡路大震災の被災者については、公的な弔いではなく、家族や生前の知り合いの人たちによる記念碑が作られている。ネパールでも、政府による集合的な記念の動きと、地域で小規模に弔う動きのどちらも起こっている。その一方で、カトマンドゥ盆地に位置する調査対象地の P 村では、地震により大きな被害があり、十五名の死者が出たにもかかわらず、政府によっても、共同体や家族によっても、記念碑等の設置は行われていない。

P 村では、地震発生から 3 周年を迎えた 2018 年 4 月 25 日前後に、サブター（七日間の儀式）と呼ばれる宗教行事が行われた。サブターの主な目的は、高齢市民ケア・センターの建設費用を賄うための寄付金を集めることであったが、サブターの招待状には、震災の死者のためであることも明記されていた。サブターの主催者は、震災の死者の写真を儀礼をおこなう壇上に置く、と語ったが、サブターの会場を訪れてみると、それ以外の要因で亡くなった死者たちの写真も震災による死者の写真と混在して置かれていた。2018 年 4 月の P 村では、サブター以外には、地震に関連した行事は行われていなかった。

本稿では、このように、P 村で震災による死者に対する特別な弔いが行われていない理由について、エルツの死の儀礼に関する論考を参照しつつ、災害直後の P 村における死の儀礼の実践と関連付けつつ論じる。

トラウマ記憶の表出と沈黙について－日本・北米・韓国在住被爆者の事例を中心に 愛葉由依（名古屋大学）

本稿の目的は、被爆後に国内外の各地に移住した人々と被爆地にとどまった人々のトラウマ、PTSD といった「心の傷」の問題を主題化し、その複雑なありようを、被爆者たちの五感を通じた記憶と身体感覚の動向に注目しつつ、被爆者たちのそれぞれに異なる生活史との関連において比較検討しようとするものである。

これまで、被爆体験の忘却や黙秘の傾向が、広島・長崎から遠く離れた地方に住む被爆者に特に顕著であることや、被爆者が暮らす地域の社会的条件の違いを考慮しつつ比較する必要性について指摘がなされていたにもかかわらず、従来の研究ではもっぱら広島・長崎在住者を対象としてきた。さらに、広島・長崎外在住の被爆者を対象とした例外的な研究はあっても、それらにおいては、居住地における被爆者を取り巻く生活環境に関する検討が不十分であった。特に、精神医学分野の研究では、病院の精神科に通院する被爆者を調査研究の対象とする傾向があり、取り上げる事例そのものに、ある種の偏りがあったのである。

そこで、本稿では、精神科の通院者に限定せず、被爆後に国内外の各地に移住した人々にも焦点を当てるとともに、被爆者の「心の傷」と、彼らを取り巻く社会的・文化的背景や、彼らが置かれた政治状況を含めた総合的な生活環境の關係に着目した。

その結果、被爆者に対する偏見と風評被害をはじめとする被爆者の居住地や同地での被爆者を

取り巻く社会的環境もまた、被爆者がトラウマから回復、あるいはそれと共存することを妨げる要因のひとつとなり、被爆時の記憶の再生産を誘発したことを指摘できた。そして、放射線被害によってその後も長い間、体調の不調や病に悩まされ、あるいは再発に見舞われるという事態に加え、核兵器反対、原爆反対運動などによって、「核」というつながりのなかで被爆時の記憶が呼び起こされるという点が、被爆者に特異な点として指摘できた。

B 会場

カネと功德をめぐる経済—現代タイにおける都市部新興寺院を事例に

山田実季（京都大学大学院）

本稿の目的は、現代タイの都市部新興寺院、タンマガーイ寺を事例として、上座仏教徒にとって最も重要な位置を占める功德という救済概念が、世俗的な経済価値とどのように結びつきながら寺院経済を可能にしているのか、その制度や実践の諸相を明らかにすることである。

上座仏教徒社会では、寺院や出家者に対する金品の寄進は、現世や来世でのよりよい生を実現するための救済財＝功德をもたらすと信じられている。このように、功德という救済財の獲得にとってカネの稼得が不可欠であるという理解は、先行研究において、仏教的価値と世俗の経済的価値との親和性を主張するための拠り所として維持されつづけてきた。こうした視座のもとに、タイ国内最大級の寺院として知られるタンマガーイ寺の経済的「成功」もまた、もっぱら資本主義市場経済との相乗効果として一枚岩的に論じられてきた。

これに対して本稿では、功德という宗教的救済財がかたちづくる秩序が、合理的な経済価値と不可分に結びつきながらも、世俗的な尺度には必ずしも還元されえない側面を指摘する。これによって本稿が示すことは、タンマガーイ寺が資本主義市場経済の影響を強く受けつつも、これとは差異化をはかるような独自の経済倫理や経済制度を再編成している様子である。と同時に本稿では、こうしたタンマガーイ寺の二重の理念は、＜宗教と近代＞あるいは＜宗教と経済＞をめぐるさまざまな矛盾や人々の葛藤をはらんでいることを指摘する。

勝ちゃあいってわけじゃない——パチプロが語る期待値と勝利の^{ヴァーチュ}美徳

松崎かさね（鈴鹿医療科学大学）

本発表は、パチプロ（パチンコ・パチスロで生計を立てる人）として20年間生活してきた経験をもつAさんの語りを取り上げる。彼は筆者に対し、プレーで勝つために最も大切なのは「期待値を積み上げる」ことであると語った。これはつまり、店が用意している多くの台のなかで、期待値がプラスの台をとにかく打ち続けることである。なぜなら、そうすることによって、数日は

負けが続いたとしても、大数の法則に基づいて収支は必ずプラスに上向いていくからである。Aさんは、この積み上げが最も効率よくできるように行動し、他のプロ達とその精度の高さを競い合っていたという。けれどもAさんは、その一方で「期待値の積み上げ」を抑えてでも店を「傷つけ」ないように「品」良くふるまえること、つまり店が営業を続けられるように配慮できる人こそがレベルの高いプロであるとし、「勝ちゃあいってわけじゃないんだよ」とも語ったのだった。

本発表の目的は、この一見相反するような2つの事柄がAさんにおいてなぜ両立しうるのかを考察することである。そしてそれは、「品」良くふるまうことが長い目で見ればより多くの稼ぎを得ることにつながるという実質的な利益のためだけでなく、「期待値」についてのAさんのとらえ方（決して結果は期待値に決して「収束」しないということ）と、店も自分も長く勝負を続けていけること自体が大切であるという考えが類似した構造を持っており、Aさんにおいて隠喩的に結びついて了解されていることを論じる。このことを踏まえ、「勝ちゃあいってわけじゃない」という論理が実はAさんの勝ち方であったことを結論づける。

Travelling Thangka Painters—Anthropological and historical approach towards the multi-travelling experiences of Tibetan artists

Shijun Zhang (Graduate School of the Study of Human and Environment, Kyoto University)

Tibetan thangka indicates a genre of religious art, made up of mostly, but not exclusively of paintings. Thangka is widely created in the Tibetan Cultural Region since the 12th century. The common contents of thangka are the celestial figures or the religious subjects relating to Tibetan Buddhism and the local religion, Bon. Like most art - making practices, making thangka is considered as a sedentary occupation. However, it is hard to disregard the itinerant aspect of the thangka painters' life. For most thangka painters, travelling to different sites and being hired by local monasteries are not merely triggered by economic motivations. The travelling experiences also afford painters the opportunities to learn the local artistic styles as well as to accumulate religious merits. Nowadays, due to the globalization and the unprecedented frequent movements, thangka painters start to engaging with a more volatile world, the Art World. In this article, I will focus on their multi - travelling experiences. Specifically, by examining the thangka making practices in 2 historically notable loci of thangka making, Rebgong and Lhasa, I aim to outline the historical process of the so - called "*Industrialization of Thangka, (tang ka chan ye hua)*" evolved under the larger narrative of the Modernization in Tibet. Secondly, by analyzing 2 travelling experiences, a Sichuan - born Tibetan thangka painter travelling in west China, and a Shikatsé - born Tibetan thangka painter travelling to the global art world, I try to illustrate the complexity of their travelling experiences and to argue the strategic use of the concept of Tibetan Culture during their travels.

A Japanese Ethnographer in the Gulf: The Politics of Gender, Age and Nationality**Manami Goto (PD, JSPS Research Fellowship for Young Scientists)**

This article recounts a period of over 14 months of ethnographic fieldwork undertaken by the author on both sides of the Persian/Arabian Gulf, particularly in the United Arab Emirates and Qeshm island of Iran. This is explored through the lens of auto-ethnography, emphasising my identity as a young Japanese woman researching local women's masking traditions. The identity and social characteristics of a researcher can strongly influence the collection and analysis of data, especially in qualitative research. Auto-ethnography, which builds upon qualitative research uses a personal narrative to reveal intimate relationships between the researcher and the culture. While some scholars call the objectivity and validity of auto-ethnography into question, incorporating the voices of the researchers and their personal experience in the field can shed light on a variety of new aspects of the studied communities and help unfamiliar readers of the region to gain better understanding of it. Especially in the Middle East, including the Gulf, anthropological research has historically been carried out by male Western researchers, my experience as a Japanese ethnographer has different stories than theirs, which contributes new perspectives and findings to the field. I therefore intend to demonstrate how my own identity—inclusive of my origin/nationality, gender, and age—provided impetus for the study of the specific topic I studied, and orientated me towards considerations of positionality. I further aim to illustrate some of the benefits and the hindrances of my identity when conducting fieldwork in the Gulf, through an auto-ethnographic recording my personal experiences. By using auto-ethnographic methods, I intend to illustrate similarities and differences in fieldwork experiences based on identity politics between an insider and outsider and between a western and non-western researcher in the Gulf. This may raise future researchers' awareness of methodological challenges and possibilities when conducting research in the Gulf and beyond.